

メキシコ 1900 - 2018

良識の建築 ミケル・アドリア

参照 | 本誌 pp.28-32

近年のメキシコ建築は良識に満ちている。おそらく両極端が今ほど接近した試しはなく、一見して対立する2つの潮流——メキシコ中心主義と国際主義——が20世紀を通じて交互に現れたが、その境界はますます曖昧になっている。ある種の均質化は、アルベルト・カラチが着手し、より若い建築家たちが引き継いだ仕事に見出せる。そこにはリスクより賢明さの、誇示より正確さの、実験より自製の希求が刻印されている。節度なるもの——美德とみなされた——は現在に降り立ち、その時間を超越した性質は過去とのいかなる絆も、未来へのいかなる呼びかけも拒否する。

20世紀を通じてメキシコ建築は、明らかに国際主義に立つ批判性を欠いた質の高いアプローチと、国民的アイデンティティの探求に向かう周縁的立ち位置の間で揺れ動いた。特異な性質を探し求めた20世紀前半の建築家たちは、メキシコ建築に最も適した記号体系をコロニアル様式に見出した。他方で、ホセ・ビラグランに率いられた新興の機能主義建築家たち——ファン・オゴルマン、ファン・レガレータ——[Fig.3]は、よりラディカルな立ち位置を選び、技術的厳密さを社会に役立てようとした。後年、インターナショナル・スタイルは誰にでも受け入れられるメキシコ版機能主義と見なされた。あらゆる利用者の特定の要求に適応し、進歩とモダニティのイメージと一体化



Fig.2: テオドロ・ゴンザレス・デ・レオン | 在独メキシコ大使館、1997-2000



Fig.3: ファン・オゴルマン | カーロとリベラの家、1932

し、経済的観点からも都合よかった。バラガンの作品は、内容を持たずともフォルムへの偏愛を推し進めた。開放性に対する閉鎖性、機能に対する代理表象性、倫理に対する美学の優位を強調することによって、この傾向は多様な潮流の中に存在した。20世紀の終わりになると、建築界にはテオドロ・ゴンザレス・デ・レオンの表現主義的な記念碑性[Figs.1,2]も、リカルド・レゴレッタの舞台装置のような色彩的風景[Fig.4]も、TENアルキテクトスの技術=国際主義的提案も包含された。2000年代初頭に、経済危機以前のアイコンの建築が、独自のアイデンティティを見つける願いからではなくグローバル化したフォルマリズムに参入したいという要求に駆られた若手建築家の一部に受け入れられた。この一時期が過ぎると、アルベルト・カラチの建築が近年のメキシコ全体で最も独創的で最も際立つ作品として人気を博した[Figs.5,6]。

—
カラチの後に頭角を現した建築設計事務所として、ロチャ+カリージョ、タチアナ・ビルバオ、プロダクトラ、デレク・デレカンパ、パンチョ・パルド、フリーダ・エスコベド、アンブローシオ・エチェガライ、ロサナ・モンティエル、MMX、フェルナンダ・カナレス、マヌエル・セルバンテス(以上はすべてメキシコシティを拠点とする)、グアダラハラを拠点とするマシアス+ペレド、ルイス・アルドレーテ、アトリエARS、ティファナのホルヘ・グラシア、そしてモンテレイのS-ARが挙げられる。彼らは同時代の諸特質をローカルな視点で純化させ、一定の実用主義に基づいてコンテキストと不動産市場の要求に答えている。新進気鋭の建築家たちが出揃ったこの豊饒な建築状況において、一部の建築設計事務所は提案の独創性によっても建築物のクオリティによっても他と一線を画している。

マウリシオ・ロチャとガブリエラ・カリージョは、既存のものを出発点とし、技術を駆使してコンセプチュアルな意味を発展させる仕事をしている。マウリシオ・ロチャ(1965年、メキシコシティ生まれ)の作品が体现するのは、設計案と作品、インスタレーションと建物、東の間のものと時間を超越したものとの連続性を模索し、フォルムと概念におけるある種の本質論を目指す議論の発展である。それは素材の表現力に基礎を置き、コンテキストへの応答として幾何学を用いる。ロチャにとって沈黙——建築的な——の抜け目ない活用は、時に格言風にもなる、無駄を省いた本質的な言葉の前奏曲である。マウリシオ・ロチャはこの感じ

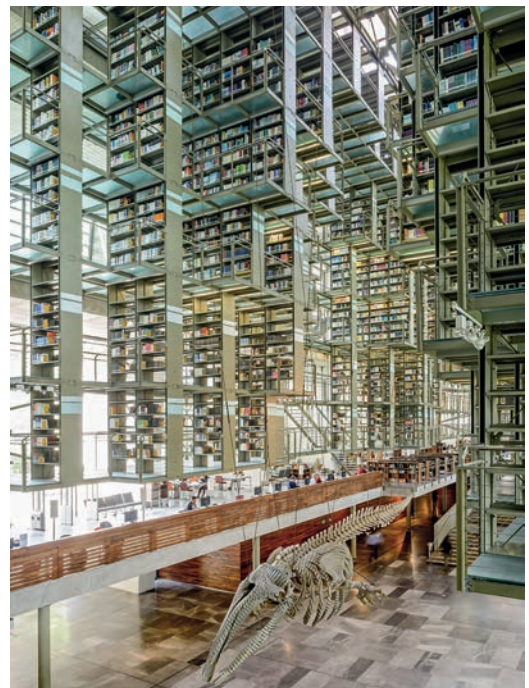


Fig.6: アルベルト・カラチ | ヴァスコンセロス図書館、2006

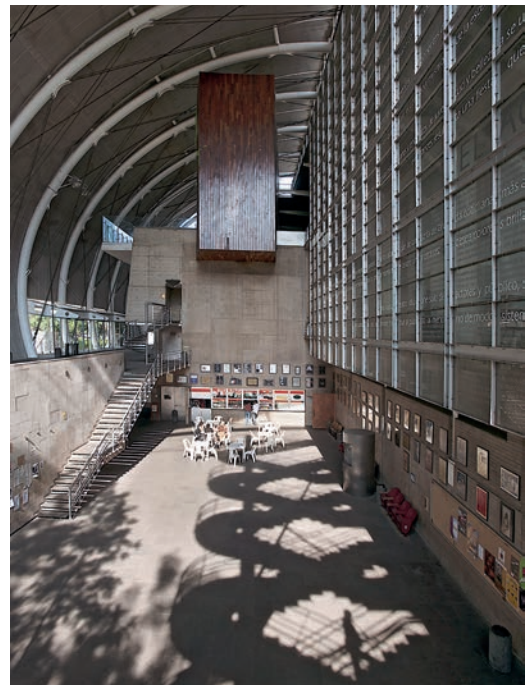


Fig.5: TEN アルキテクトス | 国立アートセンター、1994

方をガブリエラ・カリージョ(1978年、メキシコシティ生まれ)と共有している。彼らは協働して、精緻なアイデアとわずかな資源で建築を建てる。その姿勢は、フォルムの過剰と特定の技巧主義への狂乱に侵された建築シーンと鋭く対立し、素材性、内容の充実、光に立脚した基礎的で古風

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2019 Arnoldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan

センターは内向的な建物で、開口部のない閉じた外壁によって、ヴォリュームの嵌合とフォルムの戯れが強められる。都市と向かい合う開口部は少数かつ小規模で、外周の連続性を遮るのはエントランスだけだ。これに対して、屋内は大きなガラス壁によって活気づく。このガラス面は厳密に北向きとされ、屋内の部屋と屋外の中庭との空間的連続性に有利に働く。

建設技術の点からも、「ロス・チョコラーテス」計画の特徴は異なる解が代わる代わる現れることだ。壁の構成要素として使われたのは「テペタテ」という粘質凝灰岩のブロックである。「テペタテ」の使用には建物の熱効率を高める長所があり、自然換気の綿密な利用や窓からの太陽光照射の調整と組み合わせることによって、冷房機器システムを使わずに済む。構造の部分には鉄筋コンクリートが使われ、ファサードでは床スラブの水平線とブリッジ上のヴォリュームを支える屈強なグリッドに見て取れる。

色彩の重視、テクスチャー、「テペタテ」ブロックと鉄筋コンクリートのビームのざらざらした自然の質感は建物からあらゆる無駄や過剰を取り去り、屋内でも外側のファサードでも素材の使い方を通して建築の力を顕示する。

マウリシオ・ロチャとガブリエラ・カリージョの作品は、空間構成の強度、解の単純さ、そしてその建築を手がかりにクエルナバカ市の社会的再生に貢献するという基本的な意志によって異彩を放っている。

作品：ロス・チョコラーテス地区開発センター

設計：ロチャ+カリージョ——

タイユール・マウリシオ・ロチャ+ガブリエラ・カリージョ

設計チーム：Juan Carlos Montiel, Giordana Rojas,

Alma Caballero, Andrés Burguete, Karim Gómez,

Arturo Ojeda, Lilia Salgado

構造：Ingeniería Estructural Sismoresistente S.A. de C.V.;

Secretaría de Obras Públicas del Estado de Morelos-Ing.

Victor Escobar

照明技術：Eléctrica Polux, S.A. de C.V.

設備設計：Taller 2M Arq | 施工：Carser

建築主：Secretaría de Cultura del Estado de Morelos, México

スケジュール：設計・施工 2014-18年

規模：建築面積 1,763m²/ 屋外面積 1,023m²

所在地：Amado Nervo 201, La Carolina, Cuernavaca,

Morelos, Mexico

「CETRAM クアトロ・カミノス乗継ターミナル」

設計＝マヌエル・セルバンテス

首都の喧騒に隠れて フランチェスカ・セッラザネッティ

参照 | 本誌 pp.40-47

マヌエル・セルバンテス・セスベデス(1977年生まれ)の仕事は、メキシコのような国のさまざまな矛盾の間で生まれた建築の複雑さを万華鏡のように映し出す。文化と遺産が混ざり合い、社会的にも経済的にも格差が拡大し、同時代への緊迫した関係があるなかで、CCアルキテクトス(2005年設立)の諸プロジェクトは多面的な立体をつくり出している。富裕な顧客のための個人住宅や、充実した資本で実現されたエクエストリアン・プロジェクト(『CASABELLA』845号、2015)と並んで、最大限の経済性を考慮したセルフビルド住宅のプロトタイプや、メトロポリス規模のインフラストラクチャー拠点を手がけている。

あらゆるスケール、多様なタイポロジーがあるなか、ローカルな資源と労働力と両立できる建物の実現を重視した実用主義的アプローチが一貫している。設計とは、建築を実現し住まれるものにする連鎖的行為の始まりにすぎないという意識をもって、セルバンテスは自分の設計案が現場での障害と衝突しないように、簡単なメンテナンスを保証し、完成後は荒廃あるいは意味やクオリティを損なう改築から保護できるような方法で仕事をしている。

設計の厳密さと実現プロセスの統制、長持ちする素材や単純な構造と技術の選択は、無駄を省くことによって、



街路側ファサード

あらゆる自己顕示癖を拒む空間の創出を目的としている。「CETRAM クアトロ・カミノス乗継ターミナル」はこのように進められた。ハビエル・サンチェス事務所と協働で、メキシコシティの北部に実現されたプロジェクトだ。それは毎日首都に集まり首都を出ていく人々が合流する、路線バスと地下鉄2号線の終点との乗り換え地点にある。

この混沌としたコンテキストにおいて、本プロジェクトの存在は目立たない。ちょっとした休憩地点、無数の利用者が行き交う空間である。セルバンテスは「CETRAM エル・ロサリオ」(2011)においてすでにこの種のタイポロジーの経験があり、メガシティの戦略的地点における交通のテーマに取り組んだ。いずれのケースでも、建築家は効果的な仕掛けを実現し、それによって彼が創出したのは、複合的システムへの寄与という使命を帯びたひとつの菌車以外の何者でもない。

「クアトロ・カミノス」が建つのは90,000m²の土地で



歩行者用エントランス



通路/バス・プラットフォーム

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2019 Arnoldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan

メソッドにプラスに働く空間である。同時に、通路で屋外と連絡させ、教室とパティオを代わる代わる配置することで、マサトランの高温多湿の気候を和らげ、どの階にも日陰と自然換気を生み出している。

直角・垂直と煉瓦のモジュール性は厳密で想定できる方式で用いられた。ファサードに斜めの切込みが入れられ、基本構造が修正される。煉瓦はデザインに合うよう切断された。他方、三角形の開口部はコンクリート造のコーニスで囲まれた。

細胞を基礎としたフォルムの構造は、各部で実現可能な成長システムを創り出し、道路と広場の編み物を生む。ファン・ルフロが小説で語った、反響する声で満ち満ちた場所と似た村のようだ。そこでは住宅の壁が光を照り返し、開口部から空が透けて見える。「また壁から、亀裂や漆喰のはげたところから濾過されたように、ささやきが滴るように思われた。私はその声を聴いた。人々の声だった。明瞭でなく、押し殺した声だった。通り過ぎる時に何かを囁いてくる、あるいは耳の中でブンブン音を立てるような」[Juan Rulfo, *Pedro Páramo*, I ed. Colección Letras Mexicanas, 1955; Einaudi, Torino 2014]。

作品：マリア・モンテッソーリ学院

設計：エストゥディオ・マシアス+ベレド：EPArquitectos

設計チーム：Salvador Macías Corona, Magui Peredo Arenas, Erick Pérez Páez; Jalil Núñez, Sacnité Flores, Alejandra Garate

コーディネート：Isaac Veloz, Guillermo Barrera

施工：H Arquitectos + EPArquitectos

スケジュール：設計・施工 2016年

規模：建築面積 1,100m²/計画面積 2,100m²

所在地：Mazatlán, Sinaloa, Mexico

参照：本誌 pp.58-62

作品：ビビエンダス・メンドーサ集合住宅

設計：エストゥディオ・マシアス+ベレド

設計チーム：Salvador Macías Corona, Magui Peredo Arenas; Elizabeth Fernández, Oscar Maciel, Denisse Sandoval, Ernesto Rizo

コーディネート：Cristina Serrano | 施工：Carlos Mendoza

スケジュール：設計・施工 2017年

規模：建築面積 945m²

所在地：Guadalajara, Jalisco, Mexico

参照：本誌 pp.63-67

「BF邸」設計＝ルイス・アルドレーテ

ヴォリュームと影の移り変わり

フランチェスカ・セツラザネッティ

参照 | 本誌 pp.68-71

物々交換のような次元で、職人たちとやり取りし工事現場を監督できることは、ルイス・アルドレーテの仕事にとって重要な実践である。設計プロセスの推移は、グアダハラでは日常的に監督するのが一般的だが、メキシコシティではそれが難しい。車道と屋内を分ける緑豊かな中庭に面した事務所で、アルドレーテは2つの都市の違いを語りながらこれらの要素に言及し、また当然ながら、グアダハラがルイス・バラガンの生地だという事実を挙げる。タパティア建築学校と呼ばれるグループが結成されたのはこの地だ。ラファエル・ウルスア、イグナシオ・ディアス・モラーレス、ペドロ・カステジャノス・ランベイは、バラガンと並んで、自らのアイデンティティのルーツを掘り下げ、モダニティと対話する建築の代表者だった。

ハリスコ州都グアダハラにおける近年の建築は、歴史に対する特別な感受性を持つように思われる。現地の建築伝統の特質が残存し、再生・コンバージョン計画によって現代に引き継がれている。例えば、アラングレン^{フィンカ}大農場の再生計画がそうだ。この住宅は1947年にペドロ・カステジャノス・ランベイによって建てられ、アルドレーテ事務所によって修復され、オフィス・スペースにコンバージョンされた。2019年に完成したこの計画は、当初、既存の壁体にコンクリート補強材を挿入し、歴史の積層を際立たせるという控え目な意図から始まった。



平面図

設計プロセスにおける厳密さと実用主義、素材性と単純な幾何学形態の発展への注目が、ルイス・アルドレーテの建築を導く原理原則である。彼の建築は「共有の場所」の分かち合う次元や、利用者と立地環境との直接的関係に敏感である。

「リンコナーダ・マルゲリタス集合住宅」(『CASABELLA』891号、2018)の大規模プロジェクトでは、3本のアパートメント・タワーによって、地域の地勢や植生との関係における建物そのものの建築的存在が主張されていた。対して「BF邸」のような小規模プロジェクトでは、そうした特質が別のかたちを帯びる。ただしこの作品でも、光、素材、植生といった要素を取り入れるためにヴォリュームからあらゆる細部が省かれた。

この家はアート・コレクターとその家族の住まいで、グアダハラ都市部の住宅地にある広い敷地に建っている。自然との融合と空間の多彩な経験がプロジェクトの最も強い特質をなし、それはエントランスからすでに、過渡的空間の連続によって露わにされる。設計案は規模の異なる空間どうしの連関において具体化され、閤の寸法の



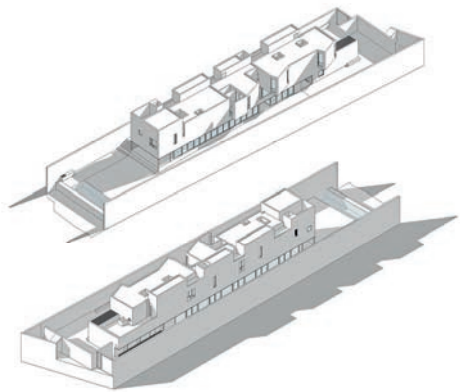
街路側ファサード



エントランス



庭より見る



アクソメ図

探求をはじめとして絶え間なくスケールを変える。屋外と屋内の間の最初のフィルターとなるのは小さなパティオで、道路沿いのポルターユからアクセスする。これは現地の伝統的建築の典型的要素を再解釈した、媒介的空間である。2つめのフィルターは庭だ。敷地内の微気候では、輪郭のくっきりした植物が光と戯れ、住宅の白いヴォリュームにその影を映し出す。こうして家のヴォリュームは投影スクリーンとなって、動き続ける。狭義の出入口より手前に設定された3つめのフィルターは、1階のヴォリュームを空にすることで生まれた屋内空間で、これが家の主たちの空間を使用人が働く部屋から分けている。家の内部と庭は全面ガラス張りの1本の廊下で結ばれる。この廊下は芸術作品を展示するギャラリーの役割を果たす。2階に上がる階段はもうひとつの過渡的空間となって、幾何学と光を結び付ける。

上層のヴォリュームは庭側が完全に閉じているが、いくつかの張り出し部によって造形され、リズムがつけられている。張り出し部を斜めにカットすることによって、住宅を東からの日射や風雨から保護し、また同時に、眺望へのパノラマを開いている。窓は厚い壁の中に隠される。部屋と部屋を隔てる扉として、車道との境目を示す境界線として、窓には奥行きがある。つまりこれも、屋内と屋外を分ける要素ではなく、通過するための空間なのだ。

作品:BF 邸 | 設計:ルイス・アルドレーテ

設計チーム:Cynthia Mojica, Jorge Muñoz Cepeda,

Diego García Cordova

施工:CoA Arquitectura

スケジュール:設計・施工 2017年

規模:敷地面積 1,350m²/建設面積 996m²

所在地:Guadalajara, Jalisco, Mexico

「ブルマ邸」「テレーノ邸」設計=フェルナンダカナレス

パティオを再解釈する:親密さと風景

フランチェスカ・セツラザネッティ

参照 | 本誌 pp.72-79

バジェ・デ・ブラボは、メキシコシティから車で2時間のところにある別荘地である。週末に、首都の喧騒から遠く離れ

て過ごす特別な場所だ。周囲は時代とともに、地形や植生との関係を設計の出発点に据えた多くの住宅建築の実験場が変わった。そのため、現在は近隣の町にも、メキシコ建築シーンの現状を象徴するエピソードを物語る一世帯用住宅が点在している。

フェルナンダ・カナレスはレセルバ・エル・ペニョンに2つの住宅を実現した。これらは風景と関係を結び、傍目には正反対に見えるが、パティオ式住宅タイポロジーを密接に



上方からの全景



通路



リビングエリア



平面図/立面図/断面図

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2019 Arnoldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan

「レバリング・トレード」「TIDアネックス」「ノバセム」

設計=アトリエARS

新たな産業風景: 建築、歴史、プロジェクト

フランチェスカ・セツラザネッティ

参照 | 本誌 pp.80-93

プロジェクトと歴史を結び付けながら原型的タイポロジーを再解釈すること、建築を通してさまざまなスケールで風景を造り上げること。これらを前提条件として、アトリエARSは動いている。アレハンドロ・ゲレーロ(1977年生まれ)とアンドレア・ソト(1987年生まれ)は、古きものと現代的なものを対話させ、過去がプロジェクトに介入する方法を探求し続ける建築的ヴォキャブラリーを使う。この傾向は2人のアソシエートの建築修業と地続きの関係にある。アレハンドロ・ゲレーロは、グアダラハラのエズス会系工科大学・西洋高等研究所(ITESO)で学んだ後、バルセロナで批評と設計の専門課程に進んだ。アンドレア・ソトはハーバード大学でランドスケープ・アーキテクチャーを学んだ。彼らにとって「コピー」は建築的行為に不可欠な実践である。アトリエARSは2000年にゲレーロが立ち上げた事務所で、2010年にソトが加わった。彼らの設計アプローチがタイポロジーを起源とすることは、初期に実現されたいくつかの住宅で明白だった。「SMO邸」(2005)や「7つの中庭のある家」(2011)は近代建築を直視しており、特にミース・ファン・デル・ローエの建築を新たな視点で捉えている。明瞭で代表的な原型的フォルムを起点に、アトリエARSは歴史からの影響をローカルな素材や工法と融合させ、独自のヴォキャブラリーを確立させた。

最初に工業界から依頼された仕事とともに形づくられた特質は、その後の事務所の仕事すべてに広がった。すなわち、生産に関わる建物の無駄のない美しさ、それらの機能を表現する明瞭さ、装飾的要素を持たないフォルムの誠実さである。こうして、「閾値の家」(2017)あるいは「鉙物の家」^{ドメスティック}の家庭的な規模においても、剥き出しのビームと素材によって、構成と素材、建設プロセスと造形的な成果がぶつかり合い、建物に強い建築的性質が与えられた。[参照:本誌p.81]

2015年にアトリエARSが完成させた「レバリング・トレード」は、グアダラハラ大都市圏のサボパンにある。工場のサイロ群とアメリカ合衆国への直通列車が停まる鉄道が

「レバリング・トレード」



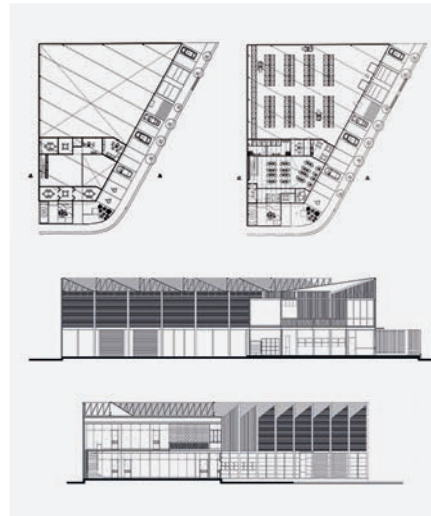
メイン・ファサード



倉庫内部

あるため、この地域は工業的な性質を帯びる。2013年に設計を依頼された建物には、技術・情報部品を製造するレバリング・トレード社の倉庫とオフィスが置かれる。設計案は、建物を構成する要素——片流れ屋根を連ねた鋸歯状の屋根とフィーレンデール架構——によってその機能を伝達し、近くに建つ他の建物と形態的に関連づけられる。ただし、ファサードに沿って反復された構造にはあるバリエーションが加えられた。2本の道路に挟まれた隅部の最後のスパンは、2層吹き抜けの高さに合わせて向きが反転され、内部にはオフィスと会議室が並ぶ。この変形は、台形の敷地における隅部のデザインを解決し、屋内空間の諸要件を表す。

産業用の建物に関する仕事は、トウモロコシを生産・販売する企業ノバセムのためのプロジェクトでさらに深められた。ただしここでは、タイポロジー研究に、眺望をはじめとするランドスケープ・デザインの研究が加わった。要素



平面図/断面図



オフィス内部

どうしの連動と疎と密の関係を指標として、仕分けから選別(機械と人手の両方による)、梱包から保管までと複数の生産工程に使われるブロックの配置が定められた。

コルテン鋼、煉瓦、石、ポリカーボネートによって、風景の幾何学的形状の上に人工的風景が創出される。2棟のコルテン鋼のパヴィリオン[荷積み棟]間に生じた透視画法的軸線の奥に、この地域原産の「パペリージョ」(カンラン科ブルセラ属)の木が1本植えられて立地環境を象徴する。一方、アガベ(リュウゼツラン)、トウモロコシ、サトウキビが周囲の農業生産の風景を構成する。スチールでできた1本の水路が、透視画法的遊戯にさらなる活力を与え、ノバセム創設者に捧げた記念プラザの彫塑的な核を形づくる。

これらのプロジェクトでは、参照源はアルバート・カーンの建築からドイツ人写真家のベルント&ヒラ・ベッヒャーの写真集まで広がる。ベッヒャー夫妻は40年以上にわた

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2019 Arnoldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan